

# ある視線恐怖症者についての一考察

—実存的精神分析の試み—

塚 本 嘉 寿  
高 垣 忠 一 郎

## はじめに

本論文は一視線恐怖症者を実存的精神分析<sup>(1)</sup>の視座から考察しようと試みるものである。

Sartre の実存的精神分析は臨床心理学、あるいは精神医学の領野でとりあげられたことは曾てなかった。このことは従来の人間学的な研究がその上に基礎を置いているところの存在論の構造と Sartre のそれとの、ある本質的な乖離に由来するものと考えられる。人間学派に理論的基盤を提供した Heidegger は存在の現象と現象の存在とを厳密に区別することを避け、両者を統一的に世界現象として捉え、更にそれを存在会得から関心、時間性へと還元する傾向にある<sup>(2)</sup>。他方 Sartre は即自と対自との絶対的な乖離を強調するが、両者の相違は例えば「超越」の概念において明らかになる。Heidegger が超越を「開け」の中に立つこと、即ち、純粹意識の地平を開示するという意味に止めるのに対し、Sartre はそれを即自に向かって対自が「炸裂」することとする<sup>(3)</sup>。このことは図式的に単純化すれば、Heidegger が被投性を重視し、Sartre が投企を強調する傾向に対応するものと考えられる。なぜならば前者の世界現象から関心、時間性へという方向は、逆に言えば情態性によって開示される、存在者一般との出会いの場としての世界の了解へと道を拓くものであるが、それは即ち現存在の被投的契機<sup>(4)</sup>の重視に外ならないからであり、他方、後者においては、即自—対自の「二元論」<sup>(5)</sup>によって、対自が常に即自を志向しつつ自らを即自でないものとして措定するところの無とされ、従ってそれは存在の決定性を越えた全面的自由を獲得し、その帰結として対自の自由な投企が強調されることになるからである。このことは Sartre の実存的精神分析が人間学的研究に本質的な影響を及ぼさなかった理由を如実に示している。それは決して Allers<sup>(1)</sup> や Stern<sup>(2)</sup> が指摘する如く、その思想が虚無的であったからではなく、人間の諸経験を通してそれらの統一的意味としての、対自が全く自由になした根源的選択を追求するという方法が精神病者の世界を理解する上で有力な手段とはなり得なかったからである。Zutt<sup>(3)</sup> や Kulenkampff<sup>(4)</sup> も、Sartre の云う意味での実存的精神分析を試みた訳ではなく、Sartre のまなごし理論を謂わば Heidegger 的な観点からとりあげて世界性の変容の記述に供したものであり、Binswanger が病者の世界内存在の構造並びにその変転を仔細に検討したのも同様の意味においてであるといえよう。Needleman は Binswanger がこれこれの事象を可能にする先験的現存在構造をとり出そうと試みた点において、Heidegger よりも寧ろ Sartre に親近性を持つと指摘したが<sup>(5)</sup>、

それは全く不適切であると考えられる。ある事象が生起することを可能にする現存在構造乃至世界投企においてわれわれの行為が一つの意味を獲得することと、個々の投企を通して導出される存在可能性の目的的全體によってわれわれの行為が一つの意味を獲得することとは同じではない。Binswanger が Sartre の実存的<sup>(1)</sup>精神分析にとっては必要でないところの、投企がそれに基づく「範疇」なる概念を重視したのも、逆に Sartre が Binswanger の現存在分析にとっては意味がない、行動の事実的多層性と意識の全面的自由とを同時に成立させるための「自己欺瞞」なる概念を不可欠なものとしたのも上述した両者の本質的相違に由来するといえよう。

実存的精神分析が臨床的研究に有効な方法としての意味を殆ど持ち得なかったのは、その自由に対するラディカリズムと、その必然的帰結である自己欺瞞の概念とに帰因するものと考えられる。一人の病者がかくあることがごとく彼の自由な選択によるものとするならば、彼の自由とは彼が強制された存在であるということとそれほど異なる訳ではなく、病者の自己欺瞞を指摘してみても、それを克服するはずの浄化的反省が具体化されない限りは、それは Freud の無意識的決定因論を聊も越えるものではないであろう。実存的精神分析は精神主義であってはならない。M-Ponty が指摘した如く、Sartre の自由の概念に欠けているのは、全く自由であるかにもえる投企を動機づけている暗黙の決断という概念であり、<sup>(2)</sup> 顕在的志向を支えている一般的志向という概念であるといえよう。そして後者こそが従来<sup>(3)</sup>の人間学的諸研究が焦点をあててきたところの地平なのである。

けれどもこうしたことは必ずしも実存的精神分析が無意味であることを意味するものではない。逆にそれは、一つの疾病が、それを負う一人の病者の自由な投企にどれだけ支えられているか、或は少なくともそれがどれだけ自由な投企の彼方にあるものであるかを明らかにするためにも根源的選択の追求を促すものである。比較的「顕在的」投企の地平で特有な歪みを示し易い疾病が存在するであろう。われわれの目的はこうした症例における病者の根源的選択をとり出すことによって、病者の存在の全体的意味を明らかにし、同時に実存的精神分析の可能性と限界を検討することである。

## 1 症例 M.Y. 学生, 20才, 男子

患者は兄二人、姉二人の五人兄弟の末子として生まれた。父は勝気な努力家であり現在農協に勤務しており、母は温厚、小心な性格であり農業に従事している。

患者は末子として比較的甘やかされて育てられ、内弁慶であり、友達の家遊びに行くようなことはあまりなかった。小学校入学当初はあまり成績がよくなかったが、高学年になってからは大体トップにいるようになった。患者は学年が変わって新しいクラスという環境になかなか慣れることができなかったが、慣れてしまうとよく暴れる方だった。けれどもそういう時でも依存的で決してリーダーシップがとれなかった。中学入学後も成績はトップクラスにあり、彼はこのことを内心強く誇りにしていた。また同時に、自分より成績の悪いものに対して一種の罪責感を

覚えた。しかし、自分より成績のよいものには憎しみを抱いたという。また、一度叱責を受けた教師や気拙い体験を持った友人に対してはそのことがいつまでも気になり、学校生活はそれ程楽しいものではなかった。中学卒業後、県下有数の名門校G高校に進学することができたが、そこは彼が通っていた郡部の学校とは全く異なった雰囲気をもっており、圧倒されるような気持を抱いた。G高校生は多くG市内の出身であったが、そういう「町の子」は態度が洗練されており、容貌も整っていていかにも秀才らしく、話し方や考え方が大人びていて他人の欠点を冷酷に見抜くようであった。彼はあらゆる点で自分が及ばないと感じた。事実、彼にとって大きな意味もっていた成績も、初めは中の下位であったが、だんだん低下していった。彼は友人をつくることができず、一年たってもクラスで名前を知らないものや話したことがないものが大勢いた。二年になってからは成績もますます下がり、クラスの友人からもますます遠ざかった。何とかして普通の高校生活を送りたいと願っていたが、実際には人並程度でも満足できない気持があり、「特別な人間」になって脚光を浴びたいといつも考えていた。勉強してみなを追い抜いてやろうとしばしば企て、緻密な計画をたててやり始めるが、いつも一週間も経たないうちに挫折した。

二年の半ば頃、黒板を見ていると隣の席の女子が視界に入ってしまうことが気になるようになった。黒板だけに視線を集中しようと努力したが、どうしても視線が分散し、「神経」が分散し、他人が見えてしまう。気になる範囲は次第に増加して、前の席や後の席の女子にも広がった。また対象も女子に限らず級友一般となった。両脇のものが視界に入るのを防ぐために両脇を立て前席のものを見ないように首を深く曲げて机の上に集中しようとする、今度は後部の席のものに視線が流れてしまうのであった。自分の目つきが悪く、視線が分散して黒板ばかりでなくその相手をも見つめているから、そのことが分かってしまうのではないかと恐れた。さまざまな防衛措置を講じたが、どうしてもばれてしまうことがあり、そうすると相手は不快そうに彼を見返したり、ちらちらと横目で彼を窺ったりした。こうした感じはますます広がり、遂には街を自転車で通る時にも、同年輩のものがいると気になるようになった。危いからまっすぐ前を向いて乗ろうと思っても勝手に視線が道行く人に分散して行ってしまった。彼によれば、それは普通より両側に視野が広いことの当然の帰結でもあった。

三年になってからはますます孤独になり、視線のことも気になるようになった。一学期の頃、クラスの女の子などが集まって雑談している時に、目つきや人柄のことを噂されて笑いものにされているような気がした。成績は最低にまで下がり、遂に授業を休み出したが、進路のことは常に念頭にあった。

いくつかの大学を受験したが全て失敗し、一年浪人したが翌年も失敗した。こうした過去から訣別し、もう一度最初からやり直そうとK市に出てきたが、予備校の入試にも失敗した。他の予備校に行こうかとも考えたが、目のことが気になって授業を受けることができるかどうか自信が持てず、同じ理由から就職することもできず、何となくR大二部の二次募集に応じて入学した。昼間はアルバイトしながら夜間に半分ほど登学し、現在二年に在学している。

高校以来いくつかの病院で投薬や心理療法を受けたが症状は改善されず、今回の来談となった。彼は一流大学に入学したいという望みを未だに捨ててはおらず、そのためにも勉強の妨げとなる視線のことを何とか治したいと考えていたが、それにもかかわらず、「絶対に治りたくない」という気持ちも持っていた。こうした気持は誰にも分からないであろうが高校時代からあり、「今さら季節はずれに望みがかなえられても却ってとまどうばかりである」という。彼は自分が熱望していて、しかも決して到達できないような生起に会うと「してやったり」と考えるのであった。人望があって生徒会の役員やスポーツなどをやりながらもいつも良い成績でいた同級生が、卒業式で堂々たる送辞を読みあげた時、彼は自分との決定的な距離を痛感して絶望した。すると「してやったり」という感じが湧くのであった。ある医院の精神科に通院していた頃、彼が秘かに思慕を寄せた看護婦がいた。その看護婦は彼にとっては高嶺の花であったが、看護婦にとっては医師が高嶺の花であることを知った。彼によれば人間は平等ではなく、質の異なったそれぞれの段階に属しているのである。この医師と彼自身とは全く異なった存在であり、人間に二種類あるというよりも、もっと差が大きく神様とその信者という感じであった。尤もこうした時の隔絶感はその程強いものではない。というのもその関係においては自分が劣っているに決まっているからである。それに対して一流大学に進学した同級生にはより強い隔絶感を覚える。彼らはまだ「雲の上」に到達している訳ではないため、どうしても競争心がわくからである。帰省した折に彼らと出会ったりすると「してやったり」と感じるのであった。しかし彼によれば、同級生よりも年少者と自分とを比較すると一層屈辱が大きいという。患者にはこのように自分の劣等感を強調しようとする傾向があり、その点が極めて特徴的である。

## 2. 考 察

この病者は幼時から依存的で自らの行為に確信が持てず、些細なことにも劣等感を抱き易い傾向を持っていた。彼は友人がそれを喜んで受け入れるかどうか確信を持てないために、あるゲームを提案するということができなかった。彼は教師や友人の些細な言動にも傷つけられた。彼は成績が思い通りでなかったことに劣等感を持っていたが、同時に成績がよいことに罪責感を持っていた。こうした傾向が決定的な意味を獲得したのは、彼が田舎の中学から都会の名門校に進学した時である。彼は成績に劣等感をもち、容姿を恥じ、自分の性格を憎んだ。彼はあらゆる機会に傷つけられ、傷つけられたことを反芻せずにはいられず、また、反芻せずにはいられない自分を嫌悪した。概略的に云って病者のこうした性格は Schneider が自己不確実者の名の下に記述した諸特徴と合致するといえるだろう。Schneider によれば、自己不確実者は自らの不全性を反省的に意識するため感受性が絶えず亢進しており、しかも受容の亢進に対して素朴に消化することで対処することができないため、どのような体験にも心を激動させられ、人々の間における自分の地位を常に不確かなものと感じる。「……これは外的体験とその解釈によって引き起された心内の恥辱と敗北の生活である。力を全く萎えさせる自己蔑視に対抗するために、外から保証を得

ようと努めるが救われようがなく……他人の態度の中には彼を故意に傷つける節があると思うようになり、外部からの蔑視にひどく苦しみ、その本当の原因は又自分にあると思う」(引用は Jaspers の要約による<sup>9)</sup>)。

けれどもこの病者に最も特徴的なのは単に自己不確実である点ではない。病者が他よりも自分が劣っていることに苦しみながら、しかも劣った者であり続けようと意志するかにみえる点である。彼は同じクラスの「秀才」が卒業式で堂々と送辞を読みあげ、自らが常に夢想していた栄光をまのあたりに負っているその秀才と自分との絶対的な距離を痛感するとき、「してやったり」と考える。また彼によれば、彼は年少の友人とつきあうのが不安であり、それは年長の人よりも年少者に及ばないと考えるときの方が屈辱感が大きいからである。にもかかわらず彼は同じ下宿の年少のD大生(R大よりも上位の大学とされている)の部屋に時折出かけてゆき、圧倒され、羨望と憎悪を抱いて帰ってくる。けれども一人になってから彼は自分は自分であるという「ややくそまじりの優越感」を抱くという(そう云った後で、彼は「心の底からそうは納得できない」と不安そうにつけ加える)。面接が始まった頃、彼は自分の不安を種々訴えた後で、「先生には分かってもらえるかどうか分かりませんが」苦しくても一方で、もう治りたくないという気持も持っている、と表明した。無論、彼といえども自分が劣っていることを苦しむ限りにおいては、他よりも優越しようとする。彼はなんとか成績をあげようと努力した。だがそれは常に失敗し、高校二年の半ば頃からそうした試みは完全に放棄された。それと同時に彼自身にも十分には理解できないところの、あの劣等性への満足が時折出現するようになったのである。自らが決定的に劣っていると感じる時に、それを苦しみながらも、同時にいわば一種の喜びを覚える、あるいは *aurea mediocritas* であるよりもむしろ劣等者であるべく意志するようになったのである。こうした態度を、われわれはドストエフスキーの「地下生活者の手記」の中により拡大された形で見出すことができる。ドストエフスキーの描く地下生活者は、おそろしく自負心が強いにもかかわらず、もし仮に平手打ちでも食わされたならば、かえってそれを喜び、殊に自分の進退きわまった窮境を痛切に意識する時などは絶望の中に強烈な快感を覚えるに相違ない、と考える人間である。この地下生活者は時折の彼の地下のわび住居から街へ出てゆく散歩の際に、身なりのよい将校や貴婦人たちに道をゆずりながら極めて見苦しい恰好で、まるでどじょうのようにちょろちょろ泳ぎまわる。そういう時、彼は自分のみなりのみすぼらしさや、ちょこちょこと動く自分の姿の下劣な浅ましさを考えただけで、心臓に痙攣的な痛みを覚え、背中に熱気を感じるのである。それは不断の耐え難い屈辱の悩みであり、彼らに比して自分は一匹の蠅にすぎないという自意識から生じるのであるが、それに対して彼は同時に、快感を覚えるのである。一匹の蠅でしかない、どじょうでしかない、二十日鼠でしかないものとして自分を強烈な自意識によって意識する地下生活者は、「40年間くらいぶつ続けに自分のうけた浅ましい侮辱を極めて零細な点まで残りなく思い起し」「その度に一層あさましいデテールを勝手につけ足しながら、自分の空想で意地悪く自分を嘲弄し、いら立たせる」のである。こうした救いようのない境遇の中に、内証して

しまった満たされざる欲望の毒素の中に、こうした熱にでも浮かされたような混沌の中に、彼は不思議な快感を覚えるのである。ここにわれわれは M. Y. の意識が、極めて拡大された形で記述されているのを見出すことができよう。

こうした意識は、何を意味し、いかにして可能であるのか。このことを考察する前に、われわれはこのような逆説がこれまでの人間の探究者たちによっていかに記述され検討されてきたかを回顧しなければならない。

Kierkegaard は「死に至る病」において、人間の絶望の諸形式を鋭く分析した。<sup>66</sup>

彼はまず地上的なるもの乃至地上的なる或るものに関して絶望して自己自身であろうと欲しないところの絶望、例えば破産あるいは失恋をこうむった自己自身でなくなりたいと欲する絶望、すなわち弱気の絶望の形式を呈示する。次に彼はさらに絶望の度合の強い形式として、地上的なる苦悩、現世的なる十字架が取りのぞかれるという可能性に希望をもったり、救われようとしたりしない絶望、絶望して自己自身であろうと欲するところの絶望、すなわち強気の絶望の形式を呈示する。このような強気の絶望者は自分のうちに非常に深くささりこんだ刺を、ひきぬくことのできないものとして永遠に自分の身にひきうけようとして欲するのであり、彼はその刺を機縁として全存在に憤激を感じつつ、その刺にもかかわらず自己自身であろうと欲する。彼は悪魔的な情熱をかけて全世界から、全存在から、不当な取扱いをうけている人間のままでいようとする。彼にとって、自分の苦悩を手もとにもっていて誰もそれを彼から奪いとらないということこそもっとも大切なことなのである。このように絶望する自己はあたかもタンタロスのように休みなく自己自身であろうとする意欲に没頭する。彼は自己の存在を憎悪しつつも自己自身であろうと欲し、みじめなままの自己自身であろうとする。それは、彼をそのように措定した力に対して挑戦的にせまり、それに自己を押しつけようとすることである。このような強気の絶望者は Kierkegaard が比喩的に語っているごとく、作家がうっかり書き損った文字のようなものである。この書き損いの文字はその作家に対して反乱を企てようとし、作家に対する憎悪から、既に書かれた自己の訂正されるのを拒否しつつ、狂気じみた強情さをもって作家に向かってこう叫ぶのである。「いや、おれは抹消されるのを欲しない、おれはお前を反駁する証人として、お前がへぼ作家であることの証人として、ここに立っているのだ。」

Freud は「精神分析的研究からみた若干の性格典型」において、シェークスピアの「リチャード三世」をひきあいに出し、「例外人」なる人間像を呈示した。<sup>(7)</sup>

「リチャード三世」の初めの独白の部分で、後にリチャード三世となるグロスターは次のように云う。「だがこの俺は、このようなやさごとには生まれつき向いていないし、自惚鏡に向かって骨を折るようにもできていない。俺は下手糞な刻印を押された出来損いの貨幣だから、流し目ですまして歩く女の前にでかけてゆく程の心臓がない。俺はそんなことをするのに必要な体の均整を全く切りとられているんだ。……つまりは、こんな笛や太鼓で平和な軟弱な時には、俺のような者は日向で自分の影法師でも眺めて、その不様な恰好をとやかくいうより他には時を面白

おかしく過ごす楽しみはない。こんな巧言令色の軟弱な時代を、楽しく暮すような色男には俺は絶対になれっこないのだから、俺は決心した。いっそのこと大悪者になってやるのだ。そしてこの頃のあのつまらぬ楽しみを呪ってやるのだ」(「リチャード三世」福原麟太郎他訳、角川文庫、より引用)。Freud はこのような独白の暗示するところの心の動きを分析し、それを次のように描写する。「自然は人に好かれる好ましい姿をおれに与えてくれなかったことによっておれに対して大変不当な仕打ちをした。人生はおれに対してその損害賠償をする義務がある。おれはこれからその賠償金をとりたてに出かけるぞ。おれはおれが例外であることを要求する。他の奴なら気にするようないろんな顧慮などは無視する権利を要求するのだ。おれは不正をすらしてもかまわないのだ。なぜっておれは不正な仕打ちを受けたのだから」。Freud によれば、こうした心理はこの例ほど大規模なものではないにしても多くの人間にみられるものであり、そのような人間は先天的な、幼兒的な損害や不正の故に、自然や運命を怨む理由を充分にもっている。ごく幼い時に自分のナルシズムや自己愛が傷つけられたものはそのことに対して損害賠償を要求するのである。

Binswanger はエレン-ウエストの症例を分析した際に<sup>(3)</sup>、エレン-ウエストが運命は彼女を太く力強くしようと欲したのに、彼女自身は細く華奢でありたいのだと云う場合(彼女は手記に「あらゆる点において私は明快で理性的なのに、この一点については混乱している。私は自分の本性に対しての闘いで破滅する、運命は私を太く力強くしようと欲しているのに、私は細く繊細でありたいのだ」と記している)、また、彼女が創造主に向かって「主よ主よ、私をおよびもどして下さい、私に今ひとたびの生をあたえ、よりよき姿にお創り下さい！」と願う場合、それによって彼女は、Kierkegaard が「死に至る病」となづけた精神の病に生涯罹患していたことを示していると指摘した。さらに彼は患者が「自分の宿命に満足していない」という症例、たとえば患者たちが、男にあるいは女に生まれなかったから、彼らがこの両親を与えられており、別の両親を与えられなかったから、彼らの授かった鼻、顔、容姿、性格、気質がこのようなものであって別のものでなかったから、という理由で自分の宿命を呪う患者、つまり、Kierkegaard のいう絶望して自己自身であろうと欲しない患者や、それとは逆に、絶望して自己自身であろうとする患者を、精神科医はよく経験するという事も指摘している。

エレン-ウエストは、彼女の宿命——女であること、両親の家、社会的階級、甘いものへの嗜好、肥満する素質、彼女の病氣——に対する拒絶と闘争の中に生きそして死んだのである。

Sartre は詩人ボードレールを彼の実存的精神分析によって解明した際に、これまでに見てきたと同様の人間像を呈示した。<sup>(4)</sup>

ボードレールの父親は彼が6才のときに死んだ。その後の母と二人きりの生活の中で、ボードレールにとって母は偶像であった。彼は母の愛情によって聖化され正当化され、母という聖堂の中に保護され幸せであった。ところがこの母が再婚したとき、ボードレールにとって新しい運命がはじまった。彼は寄宿舎に入れられた。この突然の母からの別離とそのため生じた苦悩は彼

をたちまち個人的実存の中に投げこんだ。彼は一人とりのこされ、乾き切り、正当化を失い、自分が一人きりで、与えられた生活のむなしいことを知って屈辱を覚える。見捨てられ、除け者にされたボードレールは次のように云う。「あなた方は私を追い払った。私をのみこんでいた完全な世界から私を放逐した。別離の生活を送るように私に強制した。ところで、この生活を今、私はあなた方に反対して要求する。あとになって私をあなた方のほうに引き寄せ、再び私をのみこもうとしても不可能だろう。私は誰にも反対して自意識をもったからである……」。あたかも彼は不当にも彼を放逐したものに対し、彼女を憎悪し告発しつづける証人として存在しつづけるがために、放逐されたもののままでいようとするかのようである。こうした態度と類似のあり方を Guex は遺棄性神経症の名の下に記述している。彼は幼年期に見捨てられ、遺棄されたという体験をもつゆえに一切の償いを要求する権利があると信じつつ、もはや愛されたくないと考える人間を遺棄性神経症者と名づけている<sup>(6)</sup> (Fanon の要約による)。だが遺棄性神経症者がもはや愛されまいとするのは、もう一度見捨てられる危険をおかしたくないからである。もし絶対に見捨てられることなく永遠に愛されるという証拠があるならば、彼はやはり愛されたいのである。その点でボードレールなどとは異なっている。

ここにとりあげたいいくつかの人間像に共通するところの特徴はまず、彼らが創造主や運命や両親によって不当な仕打ちをうけたと信じていることである。彼らは書き損われたことによって、均整のとれた体つきを与えられなかったことによって、自らの望まぬ性、容姿、素質、階級、環境を授けられたことによって、追放されはるかしめを受けたことによって、運命あるいはその代替者から不当な仕打ちをうけたと信じている。かくして運命は彼らに対して負債を負う。彼らは運命に対して債権者となり、告発者となり、損害賠償を請求する権利を獲得する。そしてその後の彼らの企てがもっとも重要なことであるが、彼らは当初彼らが望んでいたところの状態にかわることで、不当な仕打ちをとりのぞかれること、たとえば書き損いが修正されること、刺をぬかれること、立派な姿に生まれかわること、もう一度のみこまれること等をもはや望まない。書き損いのままの自己、刺のささったままの自己、醜いままの自己、放逐されたままの自己であろうと欲するのである。すなわち絶望して自己自身であろうと欲するのである。彼らにとって運命が彼らになしたところの不当な仕打ちを撤回されないこと、苦悩を手もとにもっていて誰からもそれをうばわれないことこそ大切なのである。そのことによって、彼らが運命を告発し、損害賠償を要求できる権利を保有しつづけることこそ、もっとも重要なことなのである。

以上、われわれは劣った存在であることを意志するとはどのようなことかを文献的に回顧し考察した。ここで再びわれわれの症例にもどり、こうした逆説を可能にしている病者の根源的選択を更に詳細に検討したい。

病者によれば、彼の人生が狂ってしまったり戻しがつかなくなったのは高校生活の失敗による。その失敗には一応、先天的に自分に能力がなかったこと、背伸びした高校に進学したこと、教師や学校当局が受験一本やりで適切な指導をしなかったこと、自分も怠惰であったこと、の四



つの原因がある。けれどもこれらは根本的には全て、自分が他人に誇り得るものを持つ能力を全く欠いていたことに帰着する。だから学校や教師を非難するのは誤りで、自分を責めるようになった、と病者は云う。けれども他に優越する能力のないことが、何故自己非難の対象となるのであるのか。われわれは当初それを、能力に応わしくない希望を持ったことか、或は能力の欠如を償うだけの努力をしなかったことを指すものと受けとった。しかし面接が進むにつれて次のことが明らかになった。病者が自分を責めるとは、「自分のせいでもないのに」能力の欠如者としてしか存在できない自分を憎むことであり、そのように自分を規定している「自分の先天的素質」を憎むことである。だがそれが、例えば具体的な遺伝子を指すものではないことは言うまでもない。先天的素質とは、彼を別のようにではなくこのようにあらしめたものを指すのであり、つまり彼が憎んでいるのは彼自身の運命であるといえよう。われわれはこうした根源的選択の一つのパターンを運命憎悪と命名する。

運命憎悪とは何か。それは運命によって不当な仕打ちを受け、あるいは不当な仕打ちを受けたと感じた人間が、それによって運命に対し代償を請求する権利を所有しているとみなすような一つの決断である。この場合彼は運命が本当に不当であったか、請求する代償がその不当さにみあったものであるかどうかといったことは考えない。彼のあらゆる不幸は尽く運命に収斂されるのが常である。しかも新たに加えられる不幸な体験の一つ一つは運命に対する代償請求権を一層増大させることになる。運命憎悪は憎悪されるべき運命をとりこみ、それと合体することによってますます肥大し、かくしてこの円環運動には限りがない。われわれの病者が、高校での実力テストの度毎に改めて一流大学入学という希望の崩壊を知る時、一流大学とされるK大に進学した同窓生と偶然出会い、自分がR大二部の学生であることを改めて確認する時、彼はこうした円環運動に魅せられているのである。しかし病者はこうした円環運動の受苦に止まりはしない。病者は運命の不当さよりも自らの要求の不当さを漠然と感じているかにみえる。そこで、もし不幸な体験によって代償請求権が増大し、その増大こそ運命憎悪に正当な根拠を与えるものであるとすれば、病者はそうした機会を逃さず捕捉しようと企てるであろう。事実彼は自分が劣等感を持っているD大生の部屋に遊びに行っては圧倒される。彼はK市内の各大学に進学したもので組織している同窓会に誘われ、あれほど同窓生に出会うことを恐れていたにもかかわらず、「皆が大人になっているのに自分だけがどれだけ幼稚なままか」をやけくそまじりに確かめに行こうとする。自らが決して持ち得ないものを全て備えている他者と惨めな自分との絶望的な距離、それゆえの屈辱感を不断に味わいなおすことが病者には必要なのである。そうした屈辱的な機会に彼が「してやったり」と思い、ある満足感、快感を覚えるようにみえるのも、屈辱によって運命憎悪の根拠を固め運命に対する代償請求権が増すゆえである。けれども、こうした事態を苦痛が即快感につながるという意味でのマゾヒズムと同様に考えてはならない。マゾヒズムにおいては、肉体的、精神的苦痛そのものが快感に転ずるのであるが、運命憎悪においては、屈辱や苦痛が運命に対する代償請求権を増すゆえに、それが満足感や快感を生じさせるのである。又ここで起っているこ

とを単なる羨望と考えるてはならない。Tellenbach は嫉妬妄想に比すべき妄想的羨望形式といったものが存在しないことに関連して両者の差異を指摘し、羨望を Haben-wollen, 嫉妬を Halten-wollen と規定した。<sup>(2)</sup> けれども病者は運命を設定することにより、かつて持たずこれからも持ち得ないであろうところのものに対しても正当な所有権を主張し、それが自分ではなく他者に与えられたことを自らの権利の侵害とみなす。例えばシラーの「群盗」においてフランツは云う。「自然の奴めが、あらゆる人種の中から醜さのかぎりを山ほどかき集めて、まるめて焼いたのがこのおれた。言語道断！誰が自然にそんな権利を与えたのだ。ある者には一物を与え、しかもおれにはよこさんなどは。生まれぬさきから自然の御機嫌がとり結べるか？ 影も形もないうちから自然の御機嫌を損ねられるか？ だのに、やつめ、なぜ依怙ひいきしやがるのだ？」（「群盗」久保栄訳、岩波文庫、より引用）。たまたま自分には欠けているあるものを他者がもっていることによる羨望が、ここでは、運命の他者への依怙ひいきによる嫉妬としてあらわれる。すなわち運命憎悪とは羨望を嫉妬として構成するところの投企である。それが嫉妬であるが故に、彼は代償請求の正当な根拠獲得を目途して、他者よりも絶対的に劣っている自己を確認しようとするのである。かくして病者は、そして一般にこの種の運命憎悪者は次の如き逆説に至る。彼は絶望的に自己自身であらぬことを欲して、絶望的に自己自身であらうと欲するに至る。これこそ Kierkegaard が記述した絶望の逆説の構造であり、また Binswanger, Storch がふりあてられた限界の否認と名づけたところのものである。<sup>(3)</sup> Binswanger はこうした投企の様式を Verstiegtheit と名づけ、分裂病者におけるそれは経験を顧慮せずに人間の問題の特定の階梯にすぎりつこうとする試みであり、神経症者におけるそれは状況全体に対する見通しの欠如に由来するものとしている。<sup>(4)</sup> われわれの症例において病者がある種の見通しを欠いているのは明らかであるが、同時に彼は Binswanger が分裂病者に特有としたところの絶望的な宿命否認という要素もあわせ持っているといえるのではないであろうか。さらに、このような絶望的に自己自身であらぬことを欲しながらしかも絶望的に自己自身であらうと欲するところの逆説的構造は、より心理学的には Erikson が否定的アイデンティティの選択と命名したところの心理構造と相通ずるところがあるかもしれない。<sup>(5)</sup> Erikson は青年期になって人間がそれまでの諸経験を統合し、自分とは何者であるかの自己定義を試みることをアイデンティティなる概念によって記述した。<sup>(5)</sup> 青年はそのアイデンティティ形成の過程でもすれば「自分とは何者であるか」について不確実になることによる混乱、すなわちアイデンティティ混乱をひきおこす。このアイデンティティ混乱の一形態として Erikson は否定的アイデンティティの選択をあげている。この否定的アイデンティティの選択とは、自らの生きる社会においてのぞましいとして肯定されるアイデンティティを構成するのに利用しうる条件が存在しない状況において、何らかの自己支配権あるいは存在理由を奪還しようとして生ずる絶望的な試みである。こうした否定的アイデンティティの選択は、同性愛者や、麻薬常用者、すねもの、ギャング、非行少年達のうちにしばしばみられるところのものである。彼らは他者から名ざされ、ふりあてられ、強制されたところの否定的な役割をひきうけ自らそれになるこ

とを意欲する否定的アイデンティティの選択によって、自らの自己定義と、自己をかく措定したところの他者に迫り、他者懲罪的に自分を押しつけるという存在理由を獲得するのである。

病者はこうした運命憎悪という根源的選択において一体何を達成しようとしているのであろうか。病者及び一般にこの種の運命憎悪者は、自己のうけた不幸や屈辱を自己の貸借表の貸方欄にひとつひとつ記入し、そのことにある満足を覚えている。それは守銭奴が金を一枚一枚数えるときの快感を想わせるものがある。だが、彼らは必ずしも現実に返済を請求しようとはしないし、金のもつ可能性を現実化しようとはしない。むしろ彼らはいつでも返済を請求できる可能性、いつでも現実化できる金のもつ可能性そのものを求めているかにみえる。例えば、バルザックの小説の人物ゴブセックはこう宣言する。「わしはひとびとの良心を金で買えるほどの金持ちさ、こいつは力じゃないかね？わしはこの上なく美しい女どもだって手にいれられるのさ……こいつは快樂じゃないかね？」。彼によれば欲しいものは何でも手にいれることができるので、つまりはもうすでに手にいれているも同然なのである。こうした金を保存する態度、可能性を保存する態度の中に求められているものは、多様な現実化への選択の自由ではなく、金のもつ何でも欲しいものはいつでも手にいれることができるということ（可能性）が、即すでもっているということ（現実化）と同然だという錯覚であり、可能性のもついつでも現実へと生成できるのだという潜在的な力の意識である。こうした態度はドストエフスキーの「未成年」の主人公、アルカージイの理想の中に端的に表現されている。彼の理想はロスチャイルドになることであった。それは彼がその気になれば、いつでもその手に雷をにぎった静かなジュピターのごとく、ゴロゴロと轟かせ、光らせ、世の人々をあっと言わせることができるのだという可能性の意識、「孤独で平静な力の意識」をもつことであった。

孤独で平静な力の意識——それこそわれわれの病者が求めていたものではないであろうか。不当な仕打ちを加えた運命に対し、いつでも、いかなる場合でも、自由に代償請求権を発動させうる可能性を保存しておくこと、それが彼にとって、不確実で汚辱に満ちた世界で自らの存在を確定させるための唯一の手段なのである。こうして彼の「存在欲求」は運命憎悪という根源的選択において充足されたかにみえる。

だが運命とは何か。運命とは偶然的な外的諸事象を自らの生の意味方向へと統合することによって、それを必然的なものとしてひきうけることである。ひきうけることは運命愛に外ならない。運命憎悪とはひとつの矛盾である。病者の誤算はこの点にあり、彼が自らの劣等性を構成する諸条件を拒否する限りにおいてのみ運命を定立する時、彼は運命に自己の決断において意味を与える根拠を喪失し、もっぱら他律的な主観内部の遊戯的円環運動へと転落した。こうした生成の停止した世界で、優劣という範疇に狭窄した病者の対他関係が、視線恐怖というそれ自体角逐を原理とする対人恐怖<sup>00</sup>を選択したのも当然といえよう。けれども病者は、運命憎悪というひとつの欺瞞によって自らの存在不安を克服しようと試みたのである。

### 3, 結 語

われわれはこの小論において、一視線恐怖症者に実存的精神分析 (Sartre) の適用を試みた。その結果、病者の根源的選択として運命憎悪という投企の仕方を取り出した。運命憎悪とは、自らが運命又はその代替者によって不当な仕打ちをうけたために、運命にその代償を請求する権利があると考えられる態度である。われわれは先づ、運命憎悪の概念を文献的に検討し、次いで症例に即してその構造を考察した。運命憎悪は不幸な体験が加われば加わるほど、代償請求の権利も増大するが故に、病者は自ら劣等者であることを確認する機会を得ようとするに至る。それによって病者が求めているのは、いつでも代償請求権を発動させうるという可能性を保存しておくことであり、かくして彼は存在欲求を充足しようと試みる。しかし運命とは偶然的所与の内的な統合であり、病者が運命を憎悪するときにはすでに運命は本来の意味を失っていることを指摘した。

この症例の実存的精神分析によってわれわれがとり出そうと試みたものは、病者の自由な投企である。無論それは、通常の意味での健全な生き方ではない。しかしそれはこの病者が自ら決定した独自の存在様式なのであって、例えば Rogers の云う如く、成長や適応へと向かう途上で出会った障害のために不安定になっている偶然的受動的な存在などではない<sup>19</sup>。したがって、適応への能力と偶然的障害による困難という、一般にヒューマニストたちによって受容されているかにみえる二者択一は、それほど異論の余地のないものではない。二者択一はむしろ次のような形で呈示されるであろう。病者は自らの存在不安を回避するために「健康衝動への依存」という一つの偽善を選ぶのか運命憎悪というひとつの欺瞞を選ぶのか、と。Rogers, 並びにその追従者たちの、いささか偽善的なヒューマニズムは社会的、歴史的、実存的被規定性に盲目的のみが持ち得る特有の楽天性により、それ自身限定的な残骸的ピューリタニズムという先入見によって全ての現象を裁定し、しかもそれを以て永遠の相の下における人間性の本質を捕捉し得たとする錯覚をおしつけるという点で、実存からその原本性を奪うものであるといえよう。われわれが対決しているのは、そして対決しなければならないのは、基本的な善志向衝動への信頼がたまたま外的に欠如させられた存在などではなく、自由の限定すらも自由と相関的にしか意味を持ち得ないような個々の実存である。こうした実存の描く軌跡を明らかにすることができた時にはじめて、われわれは一人の病者の世界に参加することができるであろう。

最後に数多くの貴重な御示唆を頂いた松原公護氏にあつく御礼申しあげる。

- 附記 1. われわれは運命憎悪がここに記述したパターンに尽きるものであるとは考えない。本論で考察した病者の場合は、運命憎悪のいくつかのパターンのひとつである。
2. 本症例において、なぜ視線恐怖症という症状が選択されざるを得なかったかは、別稿で論じる予定である。

参考文献

- 1) Allers, R. : Existentialism and Psychiatry. Charles C, Tomas, Illinois, 1961.
- 2) Binswanger, L. (荻原恒一他訳) : 現象学的人間学みすず書房 東京 1967.
- 3) Binswanger, L. (新海安彦他訳) : 精神分裂病. みすず書房 東京 1959.
- 4) Binswanger, L. : Drei Formen mißglückten Daseins. Max Niemeyer, Tübingen, 1956.
- 5) Erikson, E. H. (岩瀬庸理訳) : アイデンティティー青年と危機—北望社, 東京, 1969.
- 6) Fanon, F. (海老坂武他訳) : 黒い皮膚 白い仮面 みすず書房 東京 1970.
- 7) Freud, S. (高橋義孝訳) : 芸術論 日本教文社 東京 1953.
- 8) Heidegger, M. (細谷貞雄他訳) : 存在と時間, 理想社 東京, 1964.
- 9) Jaspers, K. (西丸四方他訳) : 精神病理学総論 岩波書店 東京 1955.
- 10) 笠原嘉 : 「人みしり」, 精神分析研究, Vol.15 No2, 1969.
- 11) Kierkegaard, S. (斎藤信次訳) : 死に至る病 岩波書店 1939,
- 12) Kulenkampff, C. : Erblicken uad Erblickt-werden. Nervenar T, 27 ; 2 1956.
- 13) M-Ponty, M. : Phénoménologie de la perception. Gallimard, Paris, 1945.
- 14) Needleman, J. : Being-in-the-world. Basic Books, New-York, 1963.
- 15) Rogers, C, R. (友田不二男訳) : 精神療法 岩崎書店, 東京, 1965.
- 16) Sartre, J, P. (松浪信三郎訳) : 存在と無 人文書院, 京都, 1960.
- 17) Sartre, J, P. (佐藤朔他訳) : シチュアション I 人文書院, 京都, 1965.
- 18) Sartre, J. P. (佐藤朔訳) : ボードレール 人文書院, 京都, 1956.
- 19) Stern, A. (亀井裕訳) : サルトル論 筑摩書房, 東京, 1963.
- 20) Storch, A. : Die Daseinsfrage der Schizophrenen. Schweiz, Arch, Neurol, Psychiat. 59 : 330 1947.
- 21) Tellenbach, H. : Zur Phänomenologie der Eifersucht. Nervenarzt, 38. Jahrgang, Heft8, S. 333—336 1967.
- 22) Waelhens, A. De. : Une philosophie de l'ambiguité. Béatrice-Nauwelaerts, Paris, 1968.
- 23) Zutt, J. : Auf dem Wege zu einer anthropologischen Psychiatrie. Springer, Berlin-Göttingen-Heidelberg, 1963.